

現代の大学生は戦争に関して何を学んできたか

—「ジェンダーで読み解く戦争」受講者調査から

守 如 子・豊 田 真 穂

0. はじめに

関西大学人権問題研究室ジェンダー研究班では、これまで大学生のジェンダー意識調査をすすめてきた¹。また、ジェンダー研究班のメンバーのうち数名で、2008年度から「ジェンダーで読み解く戦争」というタイトルの科目を担当している²。講義を通じて、「従軍慰安婦」をはじめとしたアジア太平洋戦争で生じた諸問題に対して、バックラッシュ的な（反動的な）態度をとる学生が一定程度いることに気づかされた。学生たちは、いったい何をきっかけとしてそうした態度をとるようになったのか。そしてそうした態度をとる学生の多くに、保守的なジェンダー観をもつ者が多いこともみえてきた。私たちは、大学生のジェンダー観と戦争観との関連について検討する必要があると思いたるようになった。

各人の戦争観を形成するのが、継承された戦争の「記憶」である。アジア太平洋戦争における「記憶」に関しては、これまで多くの研究が蓄積されてきた。例えば、日本における「記憶」の語られ方に関しては、一般に、加害体験の秘匿と、被害体験の伝承という特徴が指摘されている³。戦争体験の風化が問題視される現在、大学生は戦争に関して誰から何を教えられ

1 『関西大学人権問題研究室紀要』16号・29号・47号・58号。

2 全学共通科目「ジェンダーで読み解く戦争」（担当者：豊田真穂、多賀太、源淳子、杉谷眞佐子）。受講生は1～4年次生。

3 例えば、大日方純夫 2009「戦争の体験・記憶・認識とジェンダー」米田佐代子・大日方純夫・山科三郎編著『ジェンダー視点から戦後史を読む』大月書店。

てきたのか、そしてそれが個々人の戦争観とどのように関わっているのかを明らかにする必要があるのではないか。どのような戦争の「記憶」が、いかに世代間で継承されているのか、そして、継承された「記憶」が大学生の戦争観にいかにか影響を与えているのかを実証的に明らかにしない限り、戦争をいかに教えるか、その指針を得ることは難しい。

私たちは、大学生の戦争観を分析するための前段階として、個々の戦争観を生み出す彼／彼女ら自身の知的バックグラウンドを明らかにする必要があることに思いいたった。よって、本稿では、現在の大学生が戦争に関するどのような知識を、どこから得てきたのかを調べていきたい。

1. 調査の概要

今回の調査では、2010年度秋学期の「ジェンダーで読み解く戦争」受講者に対し、授業初回および最終回の2度、自由記述式のアンケート用紙を配布した。授業履修者数は205名（留学生数名を含む）である。

初回授業のアンケートでは、(1)受講動機、(2)高校までの学校教育で戦争に関してどのようなことを学んだか、(3)学校教育以外でどのような知識を得てきたのかを尋ねた。最終回授業のアンケートでは、この授業を受けて(4)戦争に対してどのような認識の変化があったか、(5)ジェンダーに関してどのような認識の変化があったかを尋ねた。これらのアンケートの目的は、学生自身がこれまでの学校教育や社会教育からどのような戦争に関する知識を得てきた／得てこなかったと捉えているのかを明らかにすることにある。なお、下記でアンケートの記述を引用していくが、誤字脱字等については手直した。また、受講生には紀要掲載について告知してあることを書き添えておく。

ただし、今回の調査対象者は、「ジェンダーで読み解く戦争」を自ら選択し、受講した学生であることに注意したい。回答には、例えば、戦争やジェンダーに関してもっと知識を得たい・考えたいとするような意識の偏り

がみられる可能性がある。今回の調査は、あくまでも今後私たちが大学生の戦争に関する知識と戦争に対する態度との関連を調べるための手掛かりと位置づける。そのため、本稿は今後の調査の設計を視野にいれてアンケートの結果をまとめていく。

2. 調査の結果

2-1. 初回アンケート

初回調査（2010年9月24日）は受講生全体（205人）の54.6%にあたる112人の学生から回答の協力を得ることができた。

2-1-1. 学校教育で学んだこと

「高校までの学校教育で、戦争に関してどのようなことを学びましたか？」に対する回答から、戦争についての認識は、年号や戦争名、戦争の経緯などといった事実関係と、日本がこうむった「被害」の側面に偏っていることが明らかになった。以下で詳しくみていこう。

2-1-1-1. 教科書の事実“程度”

まず、高校までの学校教育で学んだことは教科書の事実のみであると強調する回答のパターンが非常に多かったことを指摘しておきたい。具体的には次のような記述がみられた。

「戦争については教科書に載っている程度」

「日本が経験してきた戦争を大まかな歴史的事実だけ学びました」

「一般的な流れを勉強してきただけで、実際の詳しい中身まではあまり学んでいない」

「受験歴史程度しか学んでいません」

上記のような回答パターンでは、教科書に書かれた史実や、受験に必要な年号などの暗記事項を学んだことが指摘されているが、これらの記述にともなって、「あまり学んでいない」や「～だけ」、「～程度」といったネガティブな表現が多いことが特徴的である。ここからは、自分たちが受けてきた暗記中心で表面的な史実しか学ぶことができない歴史教育に対する不満をみてとれる。

受講生の中にはこのような学校教育の現状を分析する次のような回答もみられた。

「特に第一次世界大戦以降の日本の戦争については、今なお様々な議論があるためか、深くは教えられなかったように感じる」

「小学校では戦争に関した調べ学習をして発表したことがあります。しかし、中学と高校では、「1939年に第二次世界大戦が起きる」のように、歴史の中の出来事として学んだのみでした」

「高校では、受験対策としての勉強が中心であったが、小学校では、学芸会での演劇を通じて、また中学校では先生の意向で、書籍を用いて学んだ」

近現代史を「深く」教えることができないことや、歴史教育が受験対策に偏ってしまっているといった現状が指摘されている。高校よりも中学校、そして小学校のほうが戦争について学ぶ機会が多かったと指摘する声は多い。学齢が上がるに従って、入試対策などのために歴史を掘り下げて学ぶことができなくなっている学校教育の現状がみえる。

2-1-1-2. 学校教育の内容

具体的に、高校までの学校教育から「何を」教えられたのだろうか。指摘された学校教育の内容は2つに分けることができる。1つは、いつどんな戦争が起きたかといった事実関係を学んだとする記述である。もう1つ

が、広島・長崎の原爆被害や、沖縄における地上戦などを指摘するものである。

前者に関しては、「第二次世界大戦」という名前を書いたものが多かったほか、以下の記述のように「戦争がどのように起こったかについて学んだ」とするものがみられる。

「日本や世界の国々がどういう目的で〔戦争を〕行ったかや、その後の対応などを教科書に沿って学んだ」

「経済的、政治的な利害関係からくる国と国の争い」

「戦争の起きるきっかけとなること」

他方、後者に関しては、具体的には以下のようなものが見られた。

「沖縄の集団自決のことや少年兵、看護学生（ひめゆり学徒隊など）、また原爆についてなど、学校の修学旅行などを通して、語り部の方に話を聞いたり、ガマの見学をしたりしました」

「小学校の修学旅行で広島原爆ドーム、高校の修学旅行で沖縄に行きました。沖縄では実際にガマに入りました」

「広島和学校では平和学習というのがあって、僕はそこで被爆者の方に体験談を聞いたりしました」

上記のように、原爆、広島、沖縄といった言葉が非常に多く見られた。また、このテーマを学習するにあたって、戦争体験者の語りを聞く機会があったことがわかる回答も複数みられる。ただし、この「戦争体験者」とは、「被爆者」や沖縄戦に巻き込まれた市民などの「被害者」であって、「兵士」は含まれていないことに注意したい。

ここまで引用してきた記述にも見られるが、これらの経験や体験談を指摘する言葉以外に非常に多かったのが、戦争は「悲惨」であるとか「恐ろ

しいもの」であるといった戦争イメージを語る回答である。

「原爆のこわさ、生き残った人々の精神的、肉体的な傷」

「恐ろしくて誰も得をしないこと」

「戦争は～万人が亡くなって、女性と老人、子どもは戦争の一番の被害者だと学びました」

「領土の取り合いや国際問題がもとで起こるもの。世界中の人々を巻き込み、多くの悲しみを生み出した。再び戦争を起こしてはならない」

「悲惨」「被害」「恐ろしさ」「傷」などという言葉によって語られているのは、日本が受けた攻撃など「被害」の側面への注目である。

その一方で、アジアにおける侵略行為など、他国に対する「加害」の側面を指摘したのは以下の3人のみであった。

「日本が他国にしてきたことなど」

「日本は敗戦したけど、パールハーバーや中国などにもひどいことをしてきたということ」

「日本史で日本軍の侵略や敗北について学んだ」

以上のように、学校教育の内容としては、戦争の契機や経緯、年号などの事実関係がメインで、掘り下げて内容を学ぶ機会が与えられるときには「被害」の側面が強調されており、そうでなければ「悲惨」「恐ろしい」といったイメージで戦争を学んできた現状が明らかになった。

あくまでも参考資料ではあるが、今回のアンケートから見られる傾向を人数でも示しておこう。112人の回答のうち、学校教育で学んだこととして、「国と国の争い」といったような戦争の契機・経緯を指摘したものの、あるいは、「教科書程度／どおり」であるとしたものは61人であった。他方、

原爆・広島・長崎・沖縄のいずれかを書いたものは24人であった。「(第二次)世界大戦」または「太平洋戦争」という言葉を書いたものは17人であった(以上、重複を含む)。この項目について、「特になし」としたものは2人、無記入は6人であった。

広島などが強調されることについて一つ付け加えておかなければ、関西大学の学生は、中国・四国地方や九州など、日本列島の西側地域出身の学生が多いことに注意したい。「広島出身なので…」という記述もいくつかみられ、このことは出身地によって「戦争」を学ぶ教育機会の格差がある可能性を示唆している。

2-1-2. その他の学びの機会

他方、「学校教育以外では、戦争に関して、どのような機会に、どのようなことを知りましたか?」という質問に対しては、マスメディアを指摘する声が圧倒的に多かったほか、身近な人から戦争体験談を聞いたという声もみられた⁴。詳しくみていこう。

2-1-2-1. 戦争体験談

受講生の大半は1988～1992年生まれ世代である。私たちは当初、現在の大学生は戦争体験者を身近にもたない人が大半なのではないかと予想していた。しかし、予想に反して、自身の祖父母などが戦争を体験していて、その話を聞いたことがあると述べた人は少なくなかった。直接体験談を聞いた身近な相手として、祖父が20名、祖母が17名、その他に親戚等もあげられている。以下では、聞いた内容についてふれている記述をいくつか引用してみよう。

4 ただし、この項目については、「特になし」としたのものや、無記入のものも少なくない。「特になし」としたものは8人、無記入は11人であった。

「祖父母から第二次世界大戦の悲惨等を小学生の時よく聞いた」

「祖父母に戦時中の話を聞きました。空襲のこと、防空壕のこと、食事のことなどを聞きました」

「祖父母が生きていた頃に、祖父は戦争で海外に行き、祖母は日本で食糧難の下で暮らしたことを聞きました」

「私の祖父は広島で被爆し、その父は太平洋の海戦で海に沈んだ話をよく聞いていた」

「祖父や近所に住むおじいさんと話をしているときに、戦争で攻撃を受け負傷したことを知った」

孫世代に向けて話された経験として、空襲や被爆といった戦争被害や、戦時中の市民生活の様子など、戦争の「悲惨さ」や被害の側面が強調されていることがここでも確認できる。ただし、個人的な語りの中には、単なる被害体験の強調ではなく、加害体験の赤裸々な告白とはいえないものの、自己反省的な内容など別様なニュアンスが含まれていたことが示唆される記述がみられたことは興味深い。

「祖父の話。当時、アメリカ人のことを何一つ知らないで、上からの教育を全て信じて行動していたということ」

「曾々祖父が旧関東軍の軍医（救命）をしていたことを、それに随伴していた曾祖母からよく聞かされました。どちらかといえば、前線での残酷な話や、窮地での人間の恐ろしさについて聞かされました」

個々人の戦争体験という多様性のゆえに、受講生個々人がそこから感じとった内容も非常にバリエーションに富むものであることが予想される。

身近な人以外の「戦争体験者」の語りを聞いたことがあるとした人も少なくなかった。典型的な記述が、修学旅行などの際に「被爆者の体験」を聞いたことがあるとするものである。祖父母等の身近な人ではない「戦争

体験者」の話を対面的な状況で聞いたことがあるとした人は11人にのぼった。

受講生の中に、私たちの予想以上に戦争体験談を聞いた経験がある人が多いことは、このような体験が、もっと戦争について学びたいという意識を作り出し、この授業の受講に至った結果である可能性もありうる。戦争体験談を聞くという体験が個々人に与える影響を深く考える必要があるだろう。

2-1-2-2. マスメディア

戦争を知った機会として、なんらかのメディアを指摘した人は58人と、全体の約半数にのぼった。そのうち最も多く指摘されたのは、テレビで47人である⁵。その他に指摘する人が多かったメディアには、映画10名、書籍6名、新聞5名、マンガ4名などがある⁶。

テレビについては、具体的には以下のようなものがあげられる。

「TVをつけたときに、戦争に関するニュースや、映画、ドラマが放送されている時には、見るようにしていました」

「終戦記念日の前後にやる NHK の特別番組を家族でみます」

これらの記述にあるように、テレビという身近な媒体だからこそ、戦争が題材になるとき、選択的に番組を見ようとしている受講生がみられることは興味深い。

テレビを通じて具体的に学んだ事柄について記述しているものを書き出してみよう。

「テレビで被爆者の体験を聞き、その恐ろしさを知りました」

5 「番組」や「ドラマ」、「ニュースで流れる」といった言葉で記述したものも含む。

6 作品タイトルのみが書かれていて、小説・テレビドラマ・映画・マンガなど、複数のメディアで流通している作品については人数に含めていない。

「新聞などで戦争体験者の話を書いてあったり、テレビのドキュメンタリーを見たりして、当時の苦しい生活がうかがえた」

「終戦記念日などにする TV の特集や「ほたるの墓」などで戦争の残酷さを知った」

「テレビドラマや映画で戦争の悲惨さが分かりました」

「終戦記念日などに放送される戦争に関するテレビ番組を見て、親の名前を叫んで亡くなっていく特攻隊の存在を知りました」

「NHK 教育の深夜番組で、兵士の飢餓の話を知りました」

「テレビドラマや映画などで、日本人が洗脳されていたこと、絶対服従の軍部内の生々しさ、そして死ぬ覚悟で戦う人々の姿など」

ここでも「悲惨さ」「恐ろしさ」「苦しさ」「残酷さ」などといった言葉が多くみられる。テレビ番組においても、「日本人」の「被害」に関する側面に焦点があてられていることがわかる。また、テレビ番組のジャンルについては、ドキュメンタリー番組などで語られる戦争体験者の体験談といったノンフィクションだけでなく、ドラマや映画などのフィクションを指摘する声が多いことも特徴的である。事実に向ろうとする番組だけではなく、フィクションが大学生にとって戦争を知る手がかりになっている現状は注目に値する。テレビドラマを指摘したものは13名、ドキュメンタリー（あるいは「特別番組」）を指摘したものは12名であった（重複含む）⁷。

複数の人から、作品タイトルとして指摘されたフィクションには「火垂るの墓」と「はだしのゲン」がある。「火垂るの墓」については、この作品から学んだ内容を指摘する記述もみられた。

「「ほたるの墓」などで、戦争は皆を不幸にすると知りました」

7 このほか、「ニュース等で現在も続いている世界の紛争」という記述のように、テレビニュースを指摘するものも5人いた。

「『ほたるの墓』で戦争によって子どもたちが大人以上に不幸な目にあったこと」

「火垂るの墓」以外にも、大学生の戦争観にとって欠かすことのできない作品はたくさんあるのではないかと。どのような作品や番組が大学生に大きな影響を与えているのか、そしてそれぞれの作品や番組がどのような戦争観を作り出しているのかをより深く調べていく必要があるだろう。

2-1-2-3. 資料館

戦争というテーマを考えるために、家族旅行や、個人旅行、修学旅行などの機会が積極的に利用されていることがわかった。内容を具体的に記述しているものを引用してみよう。

「友人と旅行で広島原爆ドームに行った時と家族旅行で長崎へ行った時に、資料館に行って、原爆が人間に与えた人体的精神的な傷や苦痛の大きさと、詳細について知ることができた」

「広島原爆ドームで、原爆の恐ろしさやもたらした被害を学びました。そこで関わっている人々の思いにも触れることができました」

「修学旅行に沖縄に行って、戦争に関わりを持った人に戦争の悲惨さについて聞いた」

「友人と、沖縄に行ったとき、ひめゆり部隊や地上戦について調べました」

さまざまな旅行の機会を利用して、博物館や資料館などを訪問し、戦争を学んでいる人は少なくなかった。具体的に複数から指摘された施設としては、広島原爆ドーム・平和祈念資料館、長崎の平和資料館、沖縄のひめゆりの塔がある。

これらの博物館・資料館での学びに関する記述でも、被害体験の学習と

いう傾向や、体験者の話を聞くことの重要性が示唆されている。

2-1-3. 強調される「被害」

初回アンケートの全体をながめてみると、「戦争について学ぶ・知る」とき、アジア太平洋戦争において日本が受けた「被害」が意識されていることが改めて明らかになる。とりわけ、原爆に関連する言葉を質問項目のいずれかにおいて書いた人が非常に多かった。「原爆」という言葉を使用した人は29人、「広島」は23人、「原爆ドーム」は13人、「長崎」は7人、「被爆」は5人いた。その他、「沖縄」が13人、「ひめゆり」が5人、「地上戦」が3人、「空襲」が3人いた。また、戦争を修飾する語も特徴的である。「悲惨」という言葉を使用した人は9人、「被害」が9人、「恐ろしさ」が5人、「傷」が4人、「不幸」が2人といたように、ここからも「被害」の側面が強調されていることがよくわかる。

日本に暮らす一般市民が戦争に巻き込まれた「被害」が意識される一方、「加害」や戦争における他のアクターは記述からあまり見えてこない。唯一、「特攻隊」という言葉を書いたものが4人いたが、それ以外には、「兵士」2人、「出兵」2人、「慰安婦」2人であった。「加害」という言葉はまったく使用されていなかった。

2-2. 最終回アンケート

最終回調査（2011年1月14日）は受講生全体（205名）の51.7%にあたる106人の学生から回答の協力を得ることができた。

最終回アンケートでは、「この授業を受けて戦争に対してどのような認識の変化がありましたか？ 具体的に記述してください。」と「この授業を受けてジェンダーについてどのような認識の変化がありましたか？ 具体的に記述してください。」という二つの質問を行った。授業から得た知識を振り返ってみて、受講生は何を知らなかった／何を知るべきだと感じたのだろうか。

2-2-1. 戦争における男性：なぜ戦うのか？

講義では、第1週目のイントロダクションの後、「戦争は男のものか」というテーマの講義が3週つづく。ここでは、当然視されがちな男性のみに兵役を課す制度とは、まさに「国（女・子ども）を守るために戦う男」という男性像をつくり出すことを通じて、男性支配を正当化していることが指摘される。学生からの回答には、以下のようなものがみられた。

「戦争とは、男が最前線に送られ、命をかけて戦う、というイメージがあり、そういうものだと思っていましたが、この授業で、なぜ男だけが闘うのかという問題提起があり、当然のこのように考えていたことを考え直すきっかけになりました。」

さらに講義では、男性のみに兵役を課す制度は、社会における男性支配の正当化に寄与する一方で、男性たちが負担する「コスト」と男性たちにもたらされる「利益」は、男性内で均等に分配されているわけではないことが論じられる。つまり、戦争をするかどうかの決定に多大な影響力を持つ男性の多くは、戦争が起こってもほとんど命の危険にさらされることなく、戦争によって莫大な利益を得るが、虫けらのように殺されてゆく男性の多くは、戦争遂行の決定に影響力を持たないばかりか、戦争によってほとんど利益を得られない。こうした講義を受け、受講生のなかには男性のみが兵役を課されることの意味やジェンダーの複層性に気づいた者もいる。

「ジェンダーといえば男尊女卑という立場のイメージが強かったけれど、戦争とジェンダーを合わせてみると、社会は女性ばかりに不利益なわけではないのだと思った。男性は「兵士として国を守るのが男らしい」という考えを植え付けられ、戦場に行って命を投げ出すことを国に強いられる。男性だけが戦争に「行かなくてはならない」ということだ。私は女だけれど、もし自分が男であつたらこんな理不尽

なことには耐えられないと思う。」

受講生にとっては、戦争とは必ずしも男のものではないということが新しい発見であった。選択式の期末試験においても、この点に関連する問題を選択する者が圧倒的に多数であることが、この議論が学生達にとって大きな意味を持っていることを示唆している。

2-2-2. 戦争における女性：「慰安婦」、女性兵士、抵抗者

上記と関連して、戦争が男のものというイメージをこえて、具体的に女性たちが戦争によってどのような被害を受けたのかを意識する学生もいる。講義では、『教育勅語』の「父母ニ孝ニ」「夫婦相和シ」などにみられるように「家」制度における家長への絶対服従の関係が、臣民の天皇に対する滅私奉公との関係になぞられ、近代天皇制を支えていたことが論じられる。また、「産めよ殖やせよ」の標語にあるように、女性はなによりも子どもを産んでこそ価値を認められ、そして天皇のために、国家のために「喜んで」子どもを差し出すことが求められた。

「戦争はやはり、男のものという印象があったけど、女性も、戦争によって、多くの人が苦しみ、戦争の被害は男女関係なくあるのだと思いました」

「戦争については、ジェンダーのことと関連して学習して、本当に酷いものだと言今まで以上に感じました。特に女性は「慰安婦」にされたり、子を産むことを強いられたり、戦時以外よりも扱いが酷くなっていて同じ女として怒りを感じました」

学生たちにとって「慰安婦」問題はインパクトの大きいトピックのひとつであり、学生の関心も高く2週間かけて「慰安婦」に関する講義を行う。まず1週目に性病検診と娼婦登録を特徴とし軍隊とともに発展したヨーロ

ツパの制度と、日本における近世の遊郭などを比較しつつ、日本近代化の過程で軍国化とともに取り入れられた公娼制度と軍隊が直接関与する「慰安婦」制度の成立を追い、歴史的経緯を説明する。2週目には、その存在は既知の事実であったにもかかわらず、「慰安婦」問題は、戦後約半世紀を経て、ようやく問題視されるようになったこと、その後の日本政府の対応や日本国内における論争、そして海外における評価などを概観し、戦時下の問題がいまだに解決されていないことを説いている。受講生にとって、印象に残るのはやはり「慰安婦」にされた女性たちの苦境である。

「戦争では男性が闘って負傷したり亡くなったというイメージが強いが、その間に女性は性的暴行を加えられて肉体的にも精神的にも傷付いていたということを強く認識した」

しかし講義では、女性が必ずしも戦争の被害者になるばかりではなく、戦争の遂行に積極的に協力していった「軍国の母」の理想やジェンダー化された理解によって日本の植民地統治がいかに正当化されていったのかといったテーマも扱われる。また、アメリカにおける女性兵士創出に関しては「戦争は男の仕事」から「女も戦える」まで、実に多様な議論があること、なかでも女性の権利拡大のためには、戦闘参加制限を撤廃すべきだとする女性たちの主張に注目する。さらに、自分より弱い存在である捕虜に対して、女性もまた性的な虐待に加担していたことが明るみにでたアブグレイブ事件などをとりあげて、軍隊という暴力装置の問題性を指摘している。しかし、上記のような「女性＝被害者」のイメージは受講生の中からもなかなか払拭できない。以下は、その例外といえる。

「戦争は男性のものであり、女性には関係ないものだと思っていたが、戦争を止めようとした女性や戦争に参加した女性もいると知り、単純に「男性が始めて、男性が責任を負うもの」ではないという認識

の変化があった」

なかでも、「戦争を止めようとした女性」という指摘に注目したい。このような指摘が出た背景には、講義で取り上げたミュンヘン大学「白バラ」のメンバー、ゾフィ・ショルの抵抗運動を知ったことがあると考えられる。ゾフィ・ショルが反戦ビラの作成を手伝い、さらにキャンパス内で配布したひとりの大学生であったことは、ほぼ同世代の学生たちにとって大きなインパクトをもったことが予想される。ゾフィ・ショルと、ヒトラーの秘書をつとめた同世代の女性、トラウデル・ユンゲの比較は、以下でみるように、学生たちにとって、戦争が遠い存在から身近な問題へと変化する契機にもなっている。

2-2-3. 「国と国との争い」から「私たちの問題」へ

講義では、ゾフィ・ショルとトラウデル・ユンゲという2人の女性を比較するドイツの事例を引き合いに出すことで、戦争とは国家間の争いごとであるだけでなく、社会の構成メンバーひとりひとりが関わり、行動を選択する機会を秘めているのだという意識が芽生えることを期待している。特に民主主義社会では、そのような観点からの市民教育は欠かせないだろう。沈黙を守ることは、現にある体制を維持し強化することに加担することになるのだというメッセージを受け止める受講生もいる。

「私たちのような一般市民は戦争の被害者にしかなりえないと考えていたが、そうではないのじゃないのかと思い始めた」

「戦争というのは、それを指導した人達に全ての責任があると思っていましたが、その人たちを支持した民衆の側にも大いに責任があることが分かりました。支持した側が、自分の行っていることに責任をもたず、ただ周りと同調することで安心や確信を得ているにすぎない場合が多いため、戦争は本当に必要なのかなど、戦争についての議論が

決して生まれないことが良く分かりました」

そして、社会の構成メンバーが政治に対して無関心でいることこそが、国家体制にとって有益であることを見抜き、それゆえに教育の重要性を訴える受講生もいた。

「戦争は国家が引き起こしたものだと思っていたが、国民が国家に流され、それが戦争を支えているのだと感じた。(中略)日本でもう戦争は起こらないだろうと思っていたが、簡単に戦争は起こると思った。政治や国に対して無関心である人が多いことに恐怖を感じ、日本の歴史教育は変わるべきだと思った。人は簡単に操作されると思った。そうならないために戦争についての教育の大切さを感じた」

受講する以前、学生の多くが持っていた戦争は悲惨で恐ろしいものというイメージからくる戦争反対の意志は、個々の人びとの経験に寄り添いながら、より具体的に現実を知ることによって、強まったようだ。講義では、夫婦や天皇と臣民の間の服従関係こそが、近代天皇制を支え、軍隊を支え、同時に植民地支配を正当化していったことが具体的事例とともに詳細に説明される。

「私はこれまで人が死ぬという理由だけで戦争は絶対にダメだと思っていました。しかし、私には知らないことがたくさんありすぎました。日本軍がどのようなコトを行っていたのか、被害国の人々の思い等、私の胸にひびくものがたくさんありました。私たち世代の人はもっと戦争について知るべきだと思います」

しかし同時に、戦争反対の意志は、ただ持っているだけでは意味がないことも受講生たちは、学んでいる。それは、少し努力すれば知ることがで

きたはずのことを知らないままで過ごしたために、結果として戦争に協力してしまう可能性があることを、歴史の中から学んだからであろう。

「戦争反対の意思を実際の行動にできなかつたり、戦争の事実を知らなかつた人々が、当時を振り返り後悔の念を持っているのを初めて知った。今までは戦争の被害者と加害者というはっきりとした分け方では知らなかつたので、とても新鮮でした」

最後に、戦争がもたらした長期的な影響力を考え、またこれから起こりえる戦争への展望を持つようになる受講生もいる。

「戦争は決して過去のことではない。戦争の影響は今でも受けている。戦争は平時と比べて異常すぎるために、多くの自由がなくなる。戦争による問題は戦時より戦後の方が大きくなる」

以上のように、自分たちから遠い存在であった戦争は、実際には、ひとりひとりにとって身近な問題であること、自分とは関係のないところで知らない人が起こすものではなく、個々人の無関心と同調的な態度が生みだすものであることを、学び取る受講生が存在することは、重要である。

その一方で、「人間の殺し合いをしても何も変わらないと昔から思っていたし、今も変わりません」など、「戦争に対する認識はあまり変わらなかった」とする回答も目立った。講義にほとんど出席していない人ほどその傾向が強いとはいえ、「良く出席した」と答えた受講生のなかにも一定数見られた。また、「改めて、戦争の悲惨さを感じた」や「悲惨なもの、残酷なものというイメージ」、「平和であることの幸せをより認識できた」など、すでに持っていた「戦争＝悪」のイメージが強化されたと答える受講生も多い。このような学生の態度は、これまでの学校教育のなかで、戦争＝悪というメッセージを繰り返し受けてきたことが強く影響している可能性がある。

3. 結論

学生アンケートから見てきたのは、まず、高校までの学校教育では、年号や戦争の経緯などといった、教科書に書かれた事実関係が中心的に学ばれているという点である。その結果、戦争は、一般的には「国と国との争い」としてしか感じられていない。ただし、学生たちの中には、身近な戦争経験者の話や、修学旅行やメディアなどを通じて戦争経験者の話を聞いたことがあり、そこから受け取った印象を述べるものも少なくなかった。学生たちは、個人の経験を聞くことを通じて、戦争を「深く」学ぶことは重要だと感じているようだ。ただし、ここで言われている「戦争体験者の語り」とは、既存の研究が指摘する通り、地上戦や空襲に巻き込まれた「被害者」や「被爆者」が語る「悲惨な」被害に関する語りを中心である。近年になって加害体験の聞き取りが行われ始めているとはいえ、まだ学生にはそのような話は届いていないようだ。

他方、「ジェンダーで読み解く戦争」という講義の内容から学生たちが「考え直すきっかけ」としてくれたことは、「国と国との争い」として戦争を捉えるのではなく、戦争下に生きる個々の多様な男性や女性のあり方を通じて戦争を捉えることの意義である。戦争にいかなければならない男性の理不尽さや、女性のセクシュアリティに対する暴力、そして女性の戦争参加や（女性）抵抗者の存在などは、「国と国との争い」という視点では表面化しにくい主題といえるだろう。

そして、「私たちのような一般市民は戦争の被害者にしかなりえない」としてしまふ思考の問題性を指摘する声が複数見られたことを今一度強調しておきたい。安心を得るためにひたすら周囲に同調するような態度でいることや、戦争に対して無関心でいることが、戦争支持につながってしまうのではないかという問題提起である。

これまでの学校教育は、戦争＝悪というイメージを作り出すためとはい

え、戦争の被害面を強調することによって、この問題をおきざりにしてきたのではないか。戦争のもつ複合性や複層性、そして無関心や同調的な態度の問題性は教育において取り上げられるべき重要な主題である。例えば、ドイツでは「ナチスの犯罪性を当時の国民はなぜ見抜けなかったのか」というテーマで討論することが高校の歴史の授業に組み込まれている。一般市民がナチスに対して無批判で義務受容的な態度をとることによって、戦争の「同調者」になってしまったことの問題性を共有しているためである⁸。善と悪、被害者と加害者、あるいは男性兵士と女性被害者…などという単純な二分法的議論で戦争を捉えるのではなく、複眼的な視点でこの問題にアプローチしていく教育が目指されるべきだろう。

「同調者」という主題は、ジェンダーの問題とも密接にからみあっている。戦争観は、性別によって異なることが先行研究によって明らかにされている。戦争に関する意識調査からは、男性に戦争肯定・容認が多く、女性に「わからない」と賛否を明確にしない態度が多くみられることが指摘されている⁹。「男らしさ」が戦争を肯定する態度に結びつくことは十分に大きな問題であるが、その一方で、戦争をどう考えたらよいのか「わからない」という態度も重大な問題をはらんでいる。「わからない」という態度でいることは、戦争の潜在的な「同調者」になりかねない。こういった問題も踏まえて、戦争観とジェンダーの結びつきも分析される必要がある。

今回の受講生アンケートにおいては、戦争に対する考え方については尋ねていない。これらの知識のルートが学生の戦争観とどのような関連性をもっているのかが今後の研究課題である。今回の調査を踏まえ、どのように継承された戦争の「記憶」が、大学生のどのような戦争観と関連しているのか、そして戦争観とジェンダー観やジェンダーアイデンティティとの関連を研究することを次の研究課題としたい。

8 杉谷真佐子「戦後（西）ドイツにおける「歴史認識」の変容への一考察」関西大学人権問題研究室第6回研究学習会、2007年11月9日。

9 例えば、大日方純夫、前掲書。